

研究ノート

記憶の贈与と共視の関係

——コミュニティアーカイブと町家シネマの活動の事例から——

松 浦 さ と 子

A Relationship between the Legacy of Memories and Collective Viewing: A Case Study of an Activity Involving a Community's Archives and Machiya Cinema

ABSTRACT

Home Movie Day (HMD), an event that involves the screening of old home movies of the residents in a local community, is held worldwide. This event allows the residents to share their memories with various generations and hand down the local legacy to younger generations.

This event is held all over Japan and enables the residents to look back over the Showa Era and develop communication channels in the community.

This study examines the Fukakusa Community Archives and Machiya Cinema projects compiled by the students of the Faculty of Policy Science at Ryukoku University.

We collected and played 8 mm films with the cooperation of the residents and witnessed the joy of communication among different generations watching old movies on the local culture together. Based on this experience, we found that communication among different generations is necessary in a local society.

Keyword

Home movie day (HMD), community archive, various generations, community communication, co-watching, co-time talk

はじめに

映像を記録し観賞することは、デジタル社会となった今、日常的に容易になしうる行為となった。しかし、個人所有のPCや携帯通信機器を用いて行うため、その行為は極めて個人的な範囲に留められることが多い。ネットを用いる映像共有も激増しているが、それらの視聴も個人が孤立したスペースで行われることが大半だ。一方、社会の出来事を映像記録に納め、その上映によって伝達する行為は、長く映画や放送のプロフェッショナルの手に委ねられていた。鑑賞行為は、撮影者と鑑賞者が切り分けられ、パーソナルな関係性のなかに置かれなかったことが水島久光(2009)、原田健一(2013)らによって指摘されている。

しかし放送は、テレビ受像機の普及当初に家族や近隣の住民が集まるようなプライベートなコミュニティを形成させた。また一方、街角に設置されたテレビが、放送開始当初、人々をテレビ鑑賞の楽しみに惹きつけたことも知られている。原田(2015)は、新潟と福島の間境の山村で村落を撮影し続けた人物を中心に、親密圏(プライベート)でも公共圏(パブリック)でも商業圏(ビジネス)でもないコミューナルな場に置かれる「中間的コミュニケーション」に焦点化した研究を継続し、村落社会学や地域メディア論といった学際的な観点から考察した。

フィルム上映という動画共有の行為が教育の場など公共の場に持ち込まれ始めたのは、昭和2(1927)年、名古屋のエルモ社が国産初の16ミリ映写機を開発したことによる。第一号機は日本の映画文化や視聴覚教育に果たした功績が

大きく映像文化の歴史的資料として価値を有するものとして、2013年に日本機械学会から日本機械遺産としての認定を受けている。ただ、一般家庭に撮影と映写上映が普及するのは、昭和40(1965)年に現れた8ミリ撮影機器「フジカシングル8」の登場をきっかけとして、一般市民が映像制作を手がけることができるようになったことである。ホームムービーの領域において、撮影と上映が生活のなかの営みとなり、さらに家族を越え親密圏＝親しい人々において記憶を伝達するホームムービーの上映と観賞は、あたかも世代を越えた記憶の贈与とも受け止められている。今、世界各地でこのホームムービーの日(Home Movie Day)¹⁾の活動が広がっていることに注目したい。

コミュニティにおいてホームムービーを見ることで、親しい関係を地域住民に拡大できることに魅力があると参加者は言う。閲覧数を競うネットでの公開とは何が違うのであろうか。

本報告は、伏見区深草地域で家庭に埋もれた8ミリフィルムを探索・収集し、映像上映を試みるという龍谷大学政策学部学生の活動を報告しつつ、そこで展開されたコミュニティにおける関係づくりについて論考するものである。

さらに本論の目的は、大学生が地域社会においてホームムービーの上映会を主催し、参加者の語りを引き出す活動を通して、コミュニティにおける親密圏を公共圏にリンクさせ、物語を生み出す可能性を見出すことにある。平成生まれの若者たちが昭和の映像を見て「懐かしい」はずはない。テレビ番組などの後付の記憶と重ねた「懐かしい」は真の「懐かしい」とは異なる感覚のはずであろう。初めてみるその「(懐かしいような)新しさ」「初めての懐かしさ」とは何なのか。ホームムービーには、笑顔に満ち溢れた家族たちの振るまいや生活があり、その背後に、高度成長期において歪み始めた社会の側面も記録されてもいる。それらを共に視て(「共視」し)語り合うことで、先に生きる人々から贈られた記憶が、コミュニティの未来を描き直すことにつながるのではないか。活動は始まったばかりであり、本報告はその活動の参与観察、着手報告にすぎない。しかしその可能性

を提示し、報告としたい。

1. ふしみふかくさコミュニティアーカイブ活動とは

地域社会に分け入り、さまざまな問題解決型の活動に学生が取り組みながら学びを身につけるPBL(Problem Based Learning)は、新しい学習スタイルとして日本でも定着しつつある。古い町家を借り受けた龍谷大学深草町家キャンパスで龍谷大学政策学部コミュニティメディアゼミの学生は、2014年4月より、映像を用いて地域にお茶の間を構築しようと、「ふかくさ町家シネマ」の活動を始めた。映像を囲んだ団欒を地域に再生することで、独居高齢者たちに外へ足を踏み出してもらいたいというのだ。伏見区は平成22年度の国勢調査で人口284,085人、うち龍谷大学の存在する深草地域は「5学区に約6万人が暮らし、人口が密集する。その一つ、深草学区は京阪藤森駅の周辺に約1万8千人が住む。高齢化率は27・3%(市平均26・6%)で、実数は約5千人に上る」(京都新聞調べ2015/7/27)高齢者の多い地域である。伏見区全体でも独居高齢者が増加し、孤独死も出ている。

一方、個室でのテレビ視聴習慣が身につけてしまった学生たちには、「チャンネル争いをしてみたい」というのどかな動機もある。誰かと一緒に映像を見たい。高齢者と若者がともに集える機会を若者なりに考えたのだった。

ここで発見された8ミリ映像は「ふしみふかくさコミュニティアーカイブ事業」として収集した、個人所蔵のホームムービーである。そのため、専門技術と地域アーカイブ制作の経験の豊かなNPO法人「記憶と表現とメディアのための組織」remo²⁾松本篤の協力を得ることとなった。AHA[Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]という、映像を介したコミュニティ活動の先駆者だったからである。プロジェクト全体に関する監修、及び技術的サポートをお願いした。

なお、「ふしみふかくさコミュニティアーカイブ」の名付けも松本篤による。本来、アーカ

イブとは³⁾、ギリシャ語のアルケイオン(alcheion)に起源を持つ役人の所在する場所を表し「文書の集成、保存されている場所、従事する事務所」を指すが、松本はその「上から目線」のアーカイブに抵抗感を示す。収集した8ミリフィルムの集積を以ってアーカイブとは言わず、松本の目的とするアーカイブは、そこで上映される映像と参加者たちの対話、物語が人々の記憶にこそ残されるべきだと言うのである。時々の社会背景と分かち難く参加者に留められた「記憶」・世代を超えた異世代との「出来事」が個々人のなかにアーカイブを形成することが企図されている。

なお、町家シネマは開始後わずか1年であり、本報告は、事業の着手報告にすぎない。しかしこのアーカイブ活動で、昭和30～40年代のホームムービーや学生の作った映像を、年に10回も地域の新参者(ニューフェイス)である学生と、地域の主(ヌシ)のような旧住民である高齢者が囲んだ。そこで交わされた会話・対話には、集められた映像から引き出される記憶だけにとどまらない地域の物語が立ち現われた。学生たちが拙いながらも引き出した「物語」を振り返りながら、そこで世代を越えて映像を囲む意義を見出した。

写真1 フィルム缶を模した募集パンフレット



2. まち(伏見区深草学区)を知る

伏見稲荷大社は2014年度2015年度、最も外国人観光客に人気のある観光スポットとなった(TripAdvisor 調査)。この国際的にも知られた

日本の名所から最も近い大学が龍谷大学である。今、学生たちが学ぶキャンパスは、京都市伏見区にあった米軍の駐留地を取得し、教室や事務室もそのまま米軍キャンプ施設が使用したという場所だ。あまりの殺風景さにかつての学生たちは「草も生えていないのに深草とはこれはいかに」と嘆いたという歴史があったことも、れんがやガラスの建物が立ち並ぶ現在の深草キャンパスから想像することは困難である。が、縁あって龍谷大学に入学した学生のほとんどは大学の所在する地域の来歴も状況も、下宿生でなければ付近の商店すら認知がない。また、地方から京都に来た学生が知っているのは修学旅行で訪れる金閣寺・銀閣寺・二条城などの寺社仏閣でしかない。豊臣秀吉や坂本龍馬の活躍した京都市南部は学生にとっては観光の対象ではなかったため、伏見区の住民と交流するために地域に入るには、まずその地を歩くことから始まる。学生たちは、8ミリフィルム収集の広報のために、深草商店街、深草学区関係者に協力要請をし、地図を入手し、町家キャンパスの周辺の土地勘を得ていった。

3. ホームムービー(8ミリ映像)を公開上映

3-1. 昭和の庶民の暮らしぶりを探る(2014年4月17日)

第一回ふかくき町家シネマでは、コミュニティアーカイブの8ミリ収集公開事業の説明会を行った。収集協力を得るためremoの松本がレクチャーを行い、これまで大阪市阿倍野区で開催した上映会を紹介したニュース映像を披露した。この映像での松本の控えめな問いかけで多くを語らせる「引き出し」「問いかけ」で参加者が親密さを深めてゆく様子は、学生たちの目指すところとなった。フィルム提供者の対話の糸口を松本が投げかけると、それに応答するかのように、するすると親子の掛け合いが弾む。映像の乳幼児を指して「一生懸命育ててもこんなんですわ」と自嘲しながらも、傍らの成人した我が子を自慢気に紹介する父親。近所の不動産を解説する父親に「お父さん、えらい詳しい

ですねえ」と松本が声をかけると、長男から「この人、不動産してはる」「バブルはじけて失敗したんですけど」「2億、借金してますねん」「月末のローンどうしようと考えてるときですわ（映像をさして）」と掛け合いになり、会場から大きな笑いが起きる。町の若者から高齢者まで参加住民は、「楽しかった、法事に集まった親戚のようでした」と、プライベート映像が近づける人々の距離を物語った。

高度成長期に、町の様子は変貌する。道路を走る自動車が急速に増え、庶民の撮影する映像にも愛車が映り込む。

また、やはり大阪で用いた昭和30年代の結婚式の映像を流すと、高齢の参加者から歓声が上がった。花嫁衣装を身につけて自宅から出発する新婦の様子に女子学生が驚きの声を挙げていた。当時の幸福感が圧縮された、ジェンダー・フェミニズムの思想が庶民に届いていなかった時代の「嫁入り」映像であった。

この日は、松本がこれまでの remo の活動で入手していた映像を見ることで、地元の参加者が自宅にもないか探してみようと思っただく趣向であった。ただちに発見されることは予想できないために、このようなデモンストレーションを開催したのである。京都新聞の取材が後日あり、後の活動のための広報となった。

3-2. 昭和の庶民の暮らしを探る藤森祭にあふれる子ども（2014年7月17日）

「お見せするようなものではないですよ」。プロジェクトの問い合わせ先である留守番電話に声を残したTさんは、かつて龍谷大学で学生のサポートを担う仕事をされていた協力者でもある。8ミリフィルムを大切に保存してきたが自宅の映写機が動かず、困っていたのだそうだ。連絡を受け、映写機を携えて学生2名と松本が訪問、記録ビデオカメラを持った学生も同行し、その状況を撮影させていただいた。

長く大切に保存されていたフィルムは傷んでおらず、松本が映写機にかけ、暗くなった応接間でカタカタとリールが回るとともに映しだされた風景を見て夫妻の表情がパッと輝いた。それを記録した学生の撮影は成功していたと思わ

れる。何がフィルムに映っているのかが撮れていないので見方によっては失敗だが、ドキュメンタリーとしての撮影なら、再現不可能な表情が撮れていることは初めての撮影にしては好ましい成果だ。

この日、ほかの学生もこの成果を大学で待ち受けた。松本は持ち帰ったフィルムを再度、学生たちの前で上映した。暗くした演習室で映写機が動くのかも心配しながら待機した学生も、初めて8ミリ映像を見たのだ。そのとき上がった学生たちの歓声も貴重なかけがえのない思い出となろう。

7月に開いた町家シネマでは、Tさんのご自宅周辺で撮影された藤森祭りや京阪電車を上映した。変わらない町並みに比して、人々の服装や自動車のデザインの変化が大きかった。広域的にみこしを共有するために地点から地点にトラックで運ぶ様子も珍しく、地域の祭りのみこしを引く子どもたちの多さに驚かされた。地域に子どもたちが溢れていた。

写真2 映写機をネットで購入し町家に持ち込む



写真3 祭のみこしをトラックで町内各地に運ぶ



3-3. 昭和の祇園祭 景観条例以前の町並みを観る (2014年7月17日)

Tさんのほかに、Oさんがご家族から借り受けた映像も上映した。8ミリフィルムをすでにDVD化しておられ、祇園祭、京都駅前の丸物百貨店の映像もあった。京都駅前の景観は何度も大きく変わっていた。参加住民もそこで思い出したのだが、現在のヨドバシカメラがあるところは、最近まで京都近鉄百貨店が建っており、そして学生、筆者自身が生まれる前にそれは京都物産館として1920(大正9)年に開業した「丸物百貨店本店」であった。1951年「総合原爆展」が京大生によって開催されたデパートだが、上映会当日は誰にもその記憶はなく、後日判明する。参加者のひとり水島久光東海大学教授はスマートフォンで検索をかけ「東京丸物はパルコになったんだね」と話題を広げ、座を盛り上げた。

祇園祭の映像では、四条河原町での辻回しの様子が映っており、その周辺のビルの商業看板の大きさや数に驚かされた。京都市は平成16年12月に我が国初の景観に関する法律である景観法が施行され、祇園祭の開催される中心部の建物には企業名を示す看板は撤去された。そのため、現在「看板」があった状態を想起することは難しいのだが、K氏の提供した昭和の祇園祭りの映像では、道路の両側が商業看板で覆われていたことがわかった。河原町通りの空間が商業的に占有された状況を物語るのだった。

写真4 商業看板に覆われた河原町通り



学生のひとりが長刀鉾を指して「あの屋台は どうして動いているんですか」と高齢の参加者

に尋ねた。会場はどっと湧き「鉾やら山やら知らんのか」とうれしそうに語り出すお年寄りがとても生き生きされていたことが忘れられない。学生が誰もが知っていそうなことを知らなかったことは恥ずかしいとは感じるが、率直に高齢者にお尋ねすることは、何より上映会を盛り上げるものだとわかった。

また「あれはどこですか」と問う学生に対して、70代の高齢者の方が「永楽屋はんの前や」、50代の筆者が「阪急河原町(駅) あがったところ」と説明し、20代の学生が「マルイの前ですね」と理解したことは興味深かった。客観的にはこの地点は、四条通と河原町通の交差する「四条河原町」である。

その北東角にある永楽屋は京都でも著名な佃煮店で、この場所で創業したのは1946(昭和21)年である。一方、阪急河原町駅は、1963(昭和38)年、阪急電鉄京都本線が大宮から四条通の地下に河原町通まで延伸、開業した。そして、その南東角にあった四条河原町阪急は2010年に撤退し、その後2011(平成23)年マルイが開業したのだ。今も永楽屋は経営しているが、大学生がそこで買い物をするのではなく、彼らのランドマークはマルイなのである。同じ場所を表現する際に、認識する周辺状況やライフスタイルが世代によって異なることで、町の歴史が浮かびあがる。

写真5 昭和30年代当時の四条河原町



3-4. 憧れの海外旅行 (2014年12月18日)

深草小学校に近いコンビニエンスストアは、広い駐車場と併せたその土地には所有者のSさんご家族がその2階に住んでおられる。所蔵されるフィルムの上映のために訪問した学生とremoの松本氏は、Sさん夫妻が頻繁に海外を旅行し、そのおりに収集された剥製や置物の数々に驚かされた。通っておられるジムで「今日は龍大生と飲むんや」と語り学生たちを遅くまで歓迎してくださったという。

所蔵されていた映像は、宇奈月温泉など国内旅行や海外旅行のものが多い。ワイキキビーチで楽しんでおられた際の映像は、美しい風景とビキニ姿の女性たちであった。当日の上映会の司会を務めた女子学生は、盛り上げようとビキニの女性を「これは誰ですか」と、ご夫妻で参加くださったSさんにしつこく尋ね、照れておられる様子をはやし立てていた。

今では、無理をすれば庶民にも手の届くハワイ。しかし昭和時代には、夢の海外旅行先としてハワイがクイズ番組の優勝賞品となっていた⁴⁾。そのころ、そこを訪れた人々が何を楽しんできたのか、それは学生にも近隣住民にとって興味深いことであった。

写真6 縦長の大広間での上映会を学生が司会進行する



3-5. 亡き夫の撮影した家族「私の若いときを見たい」94才のおばあさまと (2014年12月18日)

IMAGICA に勤務するお孫さんのTさんがダンボール箱いっぱいに見つけたという8ミリフィルムは、94才のおばあさまの亡くなったお

写真7 94才のおばあさまが20才の学生に語る



連れ合いさまが撮影されたもの。大丸に勤務されていたころ、和室に不適合ほど新しい家電や音響機器を買い揃えて、近隣の方々にもテレビを見せておられたそう。8ミリフィルムも几帳面に整理され、撮影日や撮影場所が箱に記載されていた。そのため、家庭内試写をするまでもなく、上映会当日、いきなり鑑賞させていただくことになった。

寒い上映会の日は、親族のみなさんが揃って現れ、会場の半分が法事のような感じだった。学生たちは超高齢の方がお越しになるということでカイロや毛布、ストーブを会場に運び入れ、快適に映像をご覧いただけるように配慮を尽くした。前半はS家の旅行の映像、そして後半、師走の上映会であるため、多くのフィルムのなかからT家を選んでいただいたのが「47. 1. 3 お正月 御香宮、八幡宮初詣」である。

晴れ着でおせちを囲みお屠蘇を注ぐ。日本の一般的な元旦の風景であったが、屠蘇を知らない学生もあり、元旦に和装をする習慣も少なくなっている。普通にどこにもあったはずの「お正月」は、今ではとても特別な風景になっていることに気づく参加者。年賀状をカメラに向かって楽しそうに見せていた振袖のお嬢さんは、今、主婦となり94歳のお母様を介護するため実家に通う。そこからほど近い伏見城。現在は耐震構造がなく城郭には登れないため、楼閣から見下ろして撮影された映像と同じ風景はもう見ることはできない。

写真8 昭和47年にはおせち、お屠蘇、和装、年賀状、初詣がセットだった



写真9 晴れ着での初詣は家族の行事



3-6. ベトナム戦争時の脱走兵を匿った (2015年1月15日)

1968年学生運動全盛期に、伏見区竹田に実家のあるKさんは、ベ平連支援者の依頼でベトナム戦争の脱走米兵を4日間だけ匿った。当時、全国で1000件の家庭が彼らを匿ったという。米兵の名はキヤル、19歳。報道関係者だったKさんは「メモは取らないように」と言われたが、個人的にキヤルの滞在中の映像を撮影していた。その映像を同世代の学生に初めて見せて下さった。脱走兵を匿うことができるか、と司会者が会場に投げかけ「キヤルのようにかっこいい人なら匿う」と緊迫感のないやりとりがあったが、無理もない。学生たちはベトナム戦争を知らず、それを扱った映画も観ずに参加している。そしてこの日上映された映像には、すき焼きを食べ、日本酒を楽しみ、猫と遊び、祇園に出かけるという、K氏宅でくつろいだキヤルの、まるでホームステイする留学生のような映像だったからであろう。

また戦争に行くことができるか、脱走できる

写真10 毎日放送『映像'15』2015.8.31放送「我が家にやってきた脱走兵 ベトナム反戦運動47年目の真実」



かという問いかけが学生に向けられ、「行けと言われたら行くしかないだろうし、逃げることはほくらにはできない」という悲観的な意見が聞かれた。そして後日の反省会で、地域の高齢者が学生に向かい「君らが守らんで誰が日本を守るんや」と小さくつぶやいた。この方がいつか「君らだけは戦争には、やらんからな」と言ってくださることがあるだろうか。

この日、毎日放送のドキュメンタリー班が取材に訪れていた。「いつ放送されるのですか」と学生に問われたTディレクターは「君たちが反戦について何か行動を起こすのなら追いかけるよ」と答えていたが、学生たちは何も反応できなかった。そのあと、就職戦線に参戦しなければならなかったからだ。しかしKさんは行動した。キヤルのその後を追ひ、渡米したのだ。この顛末は、2015年8月30日深夜、毎日放送「映像'15」に「我が家にやってきた脱走兵 ベトナム反戦運動47年目の真実」と題されたドキュメンタリーとして放送された。北海道からロシアに渡りスウェーデンに逃れたキヤルは、その後帰国し脱走の過去のために不幸な人生を送っていた。47年ぶりにKさんと再開し伏見区に匿われた際の映像を見せられ、すき焼きや日本酒でもてなされた3日間を思い出し、改めて感謝を述べた。しかしその直後、脱走兵である自分を受け入れてもらうために友人が戦死したとウソをついたことを告白し、Kさんを驚かせる。追い詰められた恐怖を察しKさんは許し、戦争について海辺で語り合う。

伏見で撮影された古いフィルムが上映されたことを契機に、ベトナム戦争時に家族ぐるみで向き合った庶民の「反戦」運動を学生たちは知った。

学生たちは、戦後70年に際し、「伏見の映像から戦争を見る」企画を進めているほか12月19-20日、龍谷大学で「学生版市民メディアフェス」⁵⁾を開催し、Kさんにはそこで全国から集う学生たちに向けてこのフィルムの上映をお願いしている。戦争を、反戦運動を、彼らは語り継ぐことができるだろうか。

4. 関係を創ることを目指して

——対峙(話)的語りではなく
「共存的語り」のために

やまだようこ⁶⁾は、『共視論 母子像の心理学』のなかで、小津安二郎『東京物語』の老夫婦の会話に「並ぶ関係」の表象を含む三項関係と、その共存的語りである「かさねの語り」のもっとも典型的な例を見るという。「かさね」とは、「あるものの上に、あるものが添い加わる、あるものの上にあるものがつづき加わる、あることの上にあることがくりかえされる、2つ以上のことが同じ時にかちあうこと」をさすと示し、この概念には、単なる重複や反復の「重ねる」という意味だけでなく、「添い加わる」「続いて加わる」という、わずかなズレや変異を含むくりかえしによる時間的・空間的变化や推移が含まれていることが重要だと指摘されている。東京物語の老夫婦は、共に海を見ながら、「帰ろうか」「帰りたいんじゃないですか」「帰りたいんじゃない」「もう帰るか」「帰りますか」と微妙にズレを含んでくりかえされている点を、「どちらがこのことばを発してもいいほど、自己と他者のことばが、共鳴的にうたうようにリフレインされ、ひびきあっている」と「かさねの語り」を、やまだは、主体と客体が対面的に対峙してやりとりする「対話(対峙)的語り」と区別して、「共存的語り」と名づけている。

学生たちの8ミリ上映会(町家シネマ)⁷⁾では、まさに昭和と平成の時間的変化や推移、学

生の居住地と大学周辺の地域の差異について、それらは微妙ではなくかなりのボリュームを持つものの、その違いやズレを楽しみながら、今も続く「まつり」「結婚」「戦争」「家族」というテーマについて「かさねの語り」、すなわち「共存的語り」を味わい、新たに記憶に刻むことが可能となって来るように思われる。8ミリ提供者や参加者である高齢者の方々は、例外はあれど学生たちとの新しい関係を喜んでくださり、なお愛おしい存在として学生を育てることに加わってくださっていることを実感する。また学生たちは、上映会の前後に住民の自宅に招かれ、高齢者の人生に思いを馳せる機会を得て、見知らぬ他人であった地域住民と次第に親密な関係を結び交わしている。

同じものを見ることで語り合う場を作る。この体験で、「共存的語り」を交わすうちに、「対話すること」以上に、親密な関係を作るこの可能性が見えてきたように思われる。

ともに見る映像がたとえ、商業看板に埋もれる祇園祭でも、こどもが町に溢れたお祭り風景であっても。

これらのことが活動を始めてわずか1年で言えるのは、活動自体の映像記録を残し、自らの態度を学生が振り返る機会が得られたからである。マイクを向ける学生、それに反応する参加住民を客観的に見ることは、自らのコミュニケーションを創り出す場面を振り返り、反省する貴重な学びの時間を過ごせたと実感する。住民参加映画の制作でキャリアのある映画監督の長岡野亜さんが、撮影・編集指導をしてくださったことで記録映像も学生の力でまとまった。

また、町家キャンパスという古い町家を借りて設けられた大学の教室は、コンクリートで四角く設計された施設ではなく、畳、ふすま、障子、土間、たたき、座布団といった昭和のホームムービーを鑑賞するにふさわしい環境であると評価を受けることがある。

学生がお迎えして席にご案内するところまでの作法も、次第に心のもった立ち居振る舞いになってきたように見える。お茶やお菓子を差し上げることも、おもてなしの気持ちがお話ししやすい空気を創るのではないかと学生が考え

たからである。

5. コミュニティで「アーカイブする」

予算の持続性を考えても、年々卒業してゆく大学生というプロジェクトチームのメンバーの背景を考えても、今後アーカイブ事業をゼミで永続的に持続することは現実的ではないと思われる。それよりも、この上映空間の持続性を確保し、ともに良い企画であることを認識しつつ、どなたがどの映像を保存されているかの記録だけを残し、それぞれのご家庭で、貴重な8ミリ映像を「公共財」として保存をしていただくことをお願いすることとした。今後、昭和の風景を見たい住民が現れたらコミュニティの個人ご家庭に保存されている映像を、コミュニティで取り出し上映することができるようにと、この「ふしみふかくさコミュニティアーカイブ」プロジェクトでは考えている。

注

- 1) Home Movie Day アメリカのフィルムアーキビストたちが2003年に立ち上げた、家庭や地域に埋もれているプライベートフィルムを持ち寄って上映する国際的企画。毎年10月の第3土曜日に世界同時開催され、2014年10月18日(土)には第12回が開催された。2015年10月24日(土)は「グローバルにスーパー8の50周年を祝う日!」として、映画保存協会(FPS)ではこの日に“HMD 弘前”を開催する。
- 2) NPO 法人「記憶と表現とメディアのための組織」remo
- 3) マリア・バルバラ・ベルティーニ2012『アーカイブとは何か 石版からデジタル文書まで、イタリアの文書管理』法政大学出版社、p. 16
- 4) 毎日放送「アップダウンクイズ」。1963(昭和38)年から1985(昭和60)年まで放送された。10問正解でゴンドラが頂上に到達し、日本航空の協賛でハワイ旅行が贈られた。
- 5) 2003年に名古屋で始まった「市民メディア全国交流集会」は毎年各地で開催され、途中、「メディアフェス」と呼ばれるようになり、昨年の三河メディアフェスで12回を数えていたが、その後開催を申し出る地域がなく、2015年末に龍谷大学で開催することとなった。翌年に沖縄開催が予定され、その「つなぎ」も意識し企画したが、9月冒頭に沖縄開催は決定し、「学生版」とし

て学生たちが開催する意味も出てきた。

- 6) やまだようこ2005「共に見ること語ること 並ぶ関係と三項関係」北山修編『共視論 母子像の心理学』講談社選書メチエ、p. 74-87
- 7) 深草町家シネマ <http://machiya-cinema.tumblr.com/>

参考文献

- 北山修編2005『共視論 母子像の心理学』講談社選書メチエ
 水島久光2009「放送アーカイブと新しい公共圏論の可能性」『マスコミュニケーション研究』
 原田健一・石井仁志編2013『懐かしさは未来とともにやってくる 地域映像アーカイブの理論と実際』学文社
 原田健一2015「映像アーカイブによる中間的コミュニケーションの分析」『地域映像アーカイブ』新潟大学人文学部
 北村順生2015「地域映像アーカイブの活用に関する一考察 十日町情報館ワークショップ実践の試み」『地域映像アーカイブ』新潟大学人文学部

この研究ノートは、平成26年度学まちコラボ事業に採択された「ふしみふかくさコミュニティアーカイブ」と、平成26年度伏見区民活動事業・京都府民活動事業が助成いただいた「ふかくさ町家シネマ・プロジェクト」の活動から得られた知見を報告した。ご支援いただいた各助成に対し、深く感謝申し上げます。そして以下の方々の協力を得た。

株式会社吉岡映像 吉岡博行

株式会社 IMAGICA ウエスト・フィルムプロダクション部 柴田幹太

株式会社エルモ社監査役 禰信之

日本学術振興会特別研究員・京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程 久保豊

また、この稿に登場するプロジェクトメンバーの学生とは、主に企画運営を担った2013年度・2014年度・2015年度龍谷大学政策学部コミュニティメディア(松浦)ゼミの学生たちである。(2013年度)一色里穂、岩本真美、北川義貴、斎藤功紀、阪口朗、櫻井菜穂、塚田達也、中島美月、西村唯、藪中郁也、山口純平、山崎基、(2014年度)加藤駿介、外山柗人、徳珍昌輝、西澤彩音、西田尚貴、平田洋太、松本遼、山崎竜暉、(2015年度)木村夏奈、田和拓郎、吉見直樹。

なお、この一連の町家シネマとコミュニティアーカイブ活動は2008年4月19日に、日本マスコミュニケーション学会マルチメディア部会第31期第4回研究会で筆者が企画・開催した「パーソナルムービーの公共性～個人記

録映像の上映会とアーカイブ化の実践より〜」というワークショップから着想のヒントを得た。当日は名古屋市にある撮影機器、映写機器のメーカー、株式会社エルモ社歴史館で、その歴代の名機の展示を鑑賞したあとに開催した。当時から8ミリフィルムの劣化問題は石原香絵（NPO 法人 映画保存協会）によって指摘され、報告者の松本篤（NPO 法人 記録と表現とメディアのための組織 remo）や討論者の小川明子（愛知淑徳大学現在、名古屋大学）によって、古い映像を残しコミュニティとともに鑑賞する機会の重要性については、すでに

強調されていたのである。筆者は当時その報告を、「現代において家庭に眠り続ける貴重な映像遺産の発見と保存のための活動を支援するとともに、個人宅に眠っていたフィルムの上映という「事件」から、何が生まれるのか、何を生み出せるのかを問い続けたい」と残していた。学生は新たに活動を始めたが、当時の筆者の思いとリエゾンし、参加者から記憶を贈っていただくだけでなく新しい記憶を参加者それぞれに刻んでくれた学生たちの健闘は賞讃に値する。感謝したい。

（平成26年度伏見区民活動事業採択時の広報）

ふかくさ町家シネマでつなぐ異世代交流事業

ふかくさ町家シネマ・プロジェクトチーム

ふかくさ町家シネマでは、映画館のない伏見区で、古い映像やテレビ番組、映画の上映会を定期的に行っています。ただ映像を観るだけでなく、私達学生が高齢者の方々に昭和時代のことをいろいろ教わり、世代を越えたおしゃべりを楽しんでいただきながら映像を囲むというものです。チャンネル争いをしたという昔のお茶の間の団欒のような場を目指し、異世代交流や地域住民間のコミュニケーション不足が解消されるよう続けたいと思っています。ふかくさ町家シネマでのお年寄りの皆さんと私達の会話が、伏見深草地域の活性化に少しでもお役に立てば幸いです。



運営や集客は難しいものの、楽しんでいただくための工夫やおもてなしなど、多くを学びました。深草住民の方々のくらしの歴史知識や即妙なご発言で、僕達も楽しんでいます。

